

あなたは、今ある状況の中で当たり前と思わず感謝することができますか。息ははかないと新しい空気はすえません。物事を受けるためには出さなくては受けられません。しかし私たちは受けることが当たり前になってしまいました。被災地で順番をまっていますが、日本は平和なので争わなくても大丈夫だと思いでそうなのか、本当にお互いに愛し合う気持ちでそうなのでしょう。昔は、日本人は分け与える気持ちでやっていましたが、今はそうではなくなったと言われていました。何かを得るためには、吐かなくてはいけないことを私たちは本能的に知っていますが、それができません。わたしたちの口からは言葉も吐きます。吐く・・私たちの口からは十のことも一のことも出ます。叶う・・その願いをかなえるためには一を取らなくてははいけません。よい事をしようと思うときに心のマイナスをとらなければよいことはできません。口や態度で偽善をしていてもよい事にはならないのです。

「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」私たちはもう一度この愛に土台を置いて私たちのマイナスの言葉や態度を、使命や願いを叶えるためにとらなくてははいけません。私たちの心には誰も優しい気持ちがあります。私たちが生きているということは、本来温かいもので、自らが自らで何かよいことをしてあげたいと願っています。しかしその中に、自己中心があるために私たちの言動や態度にマイナスを与えてしまうのです。私たちのマイナスをとるために、どうしてそれが起きるのかを考える必要があります。(ルカ16：19～)金持ちの彼は、日々遊んで暮らしていました。その彼の家の玄関にいたのがラザロでしたが、彼は、食事から落ちるものでさえラザロにあげませんでした。ラザロのおできをなめにきていた犬がいます。当時、犬になめられるということはバカにされていることでした。ラザロはその犬におできをなめさせてやっていました。二人とも死んで後、彼は、地獄からアブラハムの懐にいるラザロの姿を見ます。その時まず、最初にラザロを自分のところによこすように、次には、ラザロを生きている自分の家族のところによこすように訴えました。あくまでラザロは自分よりも下だったのです。犬におできをなめさせてやったラザロと対照的に自分のために生きた人の生き方です。(マタイ25：29～) 今同じ日本人の多くの命が失われ、苦しんでいる中、私たちも「助けなくては」と言っていますが、助ける行動の心が大切です。聖書がその助け方について言っています。「最も小さいものにしたことが大事である」あなたにとって最も小さいものとは誰でしょうか。あなたが見下したり嫌ったりしている人かもしれませんが、あなたはそういう人たちに対してどういう気持ちで接しているのでしょうか。敵が困っていればいい気味だと思ってしまうのが人間です。私たちが嫌いな人というのは、私たちの人生に悪影響を与えるだろうと判断したからです。金持ちはラザロを嫌いで見下していました。自分は紫の同じような服を着ている人たちと一緒にいるのが楽しかったのです。あなたの友達を考えたとき、なぜその人と友達なのでしょう。私たちは自分の利得のために付き合っているのですか。私たちは困っている人を見て見ぬフリをするのは悪いと知っています。でもこういう時(大きな地震が起きた)だけしかできないというのがおかしいのです。私たちが助け合うとはどういうことでしょうか。ロープでつながれた2匹のロバが、最初は左右にあるそれぞれのえさを食べようとしてお互いに届きません。しかし、そこでどうしたらよいのか考えます。そしてそれぞれ一緒に行き、えさを食べあうのです。助け合うとはこういうことです。「助ける」というと私たちは上から目線ですが、ロバたちのように考えなくてははいけません。私たちはとかく、紐を切ろうとしてしまいます。都合のいいところは一緒に、でも利益のあるところは自分だけ・・これが自己中心なのです。私たちは聞き従う気があるのでしょうか。聞かないでいると取り戻せないところにいつてしまいます。あなたは本当に助け合うといいながら、助け合っていますか。私たちが助けられたから助ける、これが本当の助け合いです。あなたは愛され助けられているということを知っているはず。正しく生きるために①羞恥心から脱出。羞恥心の根本にあるのは個人的な失敗ではなく、みんなに見られることです。私たちは人から見られることを気にしています。だから自己中心になるのです。②見られることを見る目から、物事を見つめる目を!!人から見られていることを気にするから自己中心になるし、自分をよりよく見られる集団に入りたいし、自分を少しでも評価してくれる人に会いたいです。私たちが、不足に目が向き、人を見下すのは、羞恥心があるからです。羞恥心は第三者がいな限りありません。人から見られるからするのはいけないのです。私たちの見るという目はとかく評価の目です。自分に利益があるかどうか、それでよいのでしょうか。私たちの目をただ見る目から見つめる目に変えなくてははいけません。「栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。」(マタ6：29)着飾るのは見られた人によいものを見せるためにするのではなく、その人たちに愛を流すツールなのです。私たちの見る目を、羞恥心を取り去らなくてははいけません。私たちは評価するために生きているのではありません。本当によい気持ちでよいことをしている人は必ず成功しています。自らが豊かになることに目が向いていると助け合うなんてことは到底できません。今だけそれをして仕方がありません。自分の周りの家族、弱っている人を放っておいては仕方ありません。私たちはたくさんものを今受けています。多くの人があなただを助けてくれています。一人で生きている人はいません。そのことに感謝できていれば困った人に自然に手を差し伸べることができるはず。あなたのとっている行動1つ1つが説明できなくてははいけません。そうでなくてはあなたがよいことをしていても慈善活動にすぎません。(Iテサ5：14～)あなたに与えられている環境に感謝し、喜んでいてどう行動するべきかわかります。小さなものを励まし、全ての人を寛大な気持ちで受け入れ続ける、そうすることであなたは助ける人になり、神に助けられる人になるのです。助けることであなたの周りが変わります。③聞く耳を持つ。あなたは聞く耳をもちますか。人から言われて嫌なのは、事実だからです。「聞く耳のある者は聞きなさい。」聞く耳を持つかどうかであなたの生き方が正しくなるかどうか決まるのです。息を吸うことばかり考えないで、吐くことも考えなければいけません。聞くことをしなくてははいけません。正しいことをしているのであれば指を指されてもいいのです。正しくないことをしているから指を指されるのです。自分のすべきことをすればよいのです。私たちは自分のために言わなければならないことを言わないでいるのです。自分がすべきことをきちんとする、これが人を助けるということの根源です。あなたは命をかけて買い取られ助けられた人です。そして今も助けられて生きています。人のことを見てあげてください。愛をもって見つめてあげてください。そうすればあなたを見る人から、見つめられるようになります。見つめる時代に戻していきましょう。(要約者：岩崎祥誉)